

経塚古墳(狛江市)

正面の木立のところが経塚古墳/円墳/5世紀後半ごろの築造



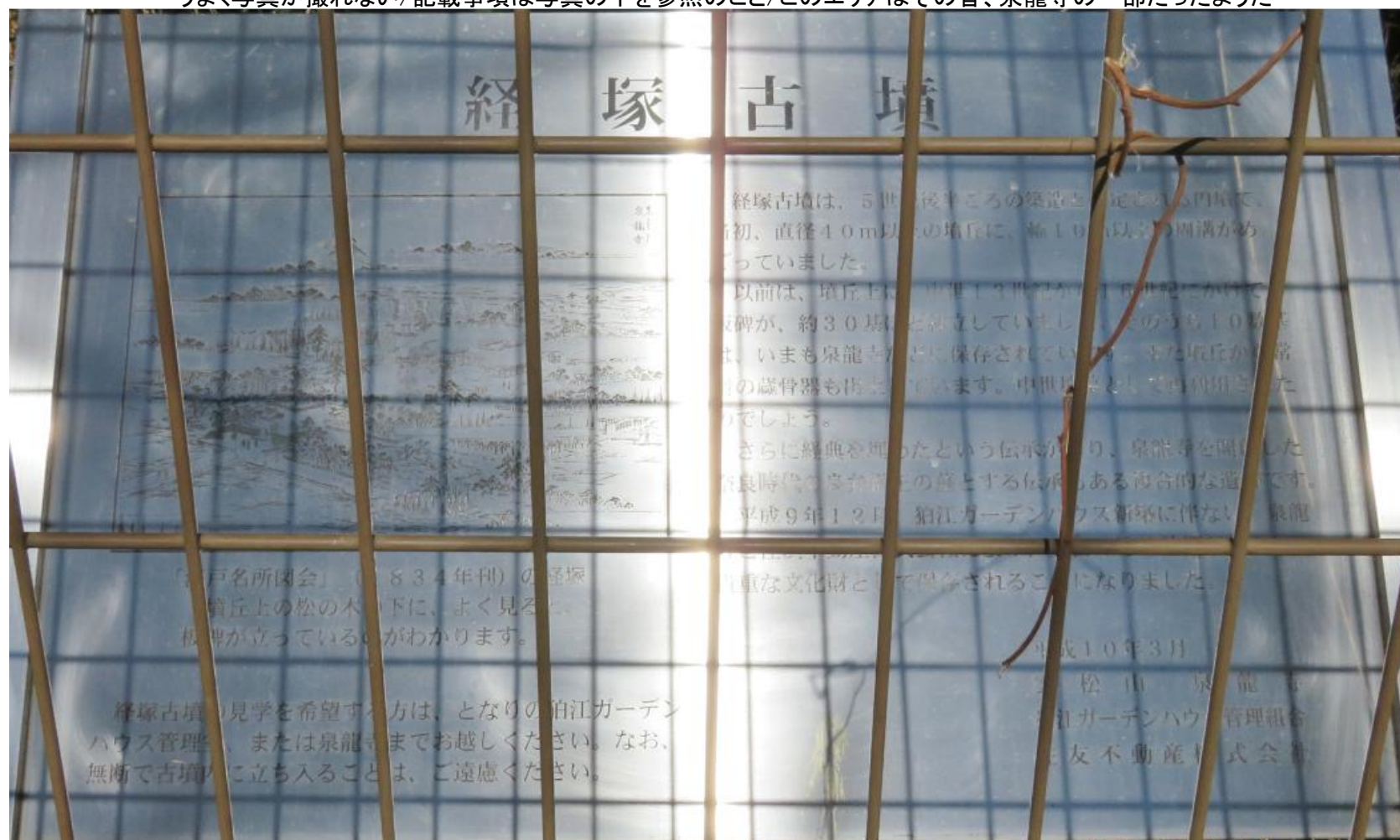
マウンドがまともに見えない/南側から見たところ



説明坂がある



うまく写真が撮れない/記事事項は写真の下を参照のこと/このエリアはその昔、泉龍寺の一部だったようだ



「経塚古墳は、5世紀後半ごろの築造と推定される円墳で、当初、直径40m以上の墳丘に、幅10m以上の周溝がめぐっていました。□
以前は、墳丘上に、中世13世紀から16世紀にかけての板碑が、約30基ほど林立していました。そのうち10数基は、いまも泉龍寺などに保存されています。中世墳墓として再利用されたのでしょうか。
さらに経典を埋めたという伝承があり、泉龍寺を開創した奈良時代の良弁僧正の墓とする伝承もある複合的な遺跡です。
平成9年12月、粕江ガーデンハウス新築に伴い、泉龍寺と住友不動産株式会社により、土留め等の整備がなされ、貴重な文化財として保存されることになりました。」

フェンスの中を覗いてみる



左端の状況



これは北東側から見たところ



さて、ここは説明坂にあった泉龍寺





山門



前方に鐘楼門が見える



鐘樓門





右手から側面を見たところ



これは本堂





拍江市指定文化財（建造物）

泉龍寺本堂、開山堂、鐘樓門、山門

附 棟札3枚

指定年月日 平成24年3月9日

江戸時代初期の縁起によると、雲松山泉龍寺は、奈良東大寺の別当として名高い良弁僧正が、天平神護元年（765）にこの地を訪れ、法相宗の奥義を広めたことに始まるとされています。天曆3年（949）には、増賀聖が廻国の折に天台宗に改め、境内をひらき、堂宇を建立しました。しかし、中世の戦乱期に寺は荒廃し、草庵だけになってしまいました。ここに、曹洞宗通玄派の柱破泉祝和尚が行脚中に訪れ、堂宇を建立して寺を復興し、多くの僧徒が参集しました。その後、曹洞宗太源派の鉄叟瑞牛和尚が居住し、天正18年（1590）の徳川家康の関東入国後、和泉村の領主となった石谷清定は瑞牛和尚に帰依し、ともに諸堂を整備しました。

泉龍寺は、良弁僧正を開闢初祖、鉄叟瑞牛和尚を中興開山、石谷清定を中興開基としています。江戸時代には、徳川将軍家から朱印地20石を拝領し、境内は約1万6,900坪に及びました。

三明龍寅和尚の代（万治から元禄頃）に、諸堂が残らず焼失してしまいましたが、以後は現在に至るまで火災などに罹りました記録はありません。伽藍は、



昭和35年（1960）の本堂

南北の中軸線上に本堂、鐘樓門、山門が配置されています。こうした中軸を基調とする伽藍配置は、曹洞宗寺院の特徴を示しており、また、境内の各所に江戸時代の行まいを残しています。

本堂 宝永3年（1706）に再建されたものです。再建時は寄棟造の茅葺屋根でした。昭和30年代以降に、改修・増築工事がなされましたが、本堂内部は江戸時代の遺構をよく残しています。

開山堂 弘化4年（1847）に建立されたものです。建立時は茅葺屋根でした。昭和30年代に増改築工事がなされましたが、堂内の格天井などは江戸時代の遺構と考えられます。

鐘樓門 天保15年（1844）に牟礼村（三鷹市）の眉山金毛和尚をはじめとして、檀家各家や近隣寺院、周辺宿村、江戸市中、泉龍寺にまつられているまわり地蔵を信仰する講中からの寄進によって再建されたものです。再建時は茅葺屋根でした。石積または枋腰の基壇部がなく、4本の柱で門の形態をとった珍しい鐘樓門です。



明治34年（1901）の鐘樓門

山門 安政6年（1859）に再建されたものです。再建時は切妻造の瓦葺屋根でした。建築を請け負ったのは和泉村の大工で、部材は境内の樹木が用いられました。

泉龍寺建造物の再建及び建立は、領主の石谷家や地域の檀家各家のみならず、周辺宿村や江戸市中、多摩地域周辺に広がるまわり地蔵を信仰する講中などからの寄進をもとに進められました。また、造作は、拍江周辺や地元の職人の手によってなされており、地域にとって貴重な文化財です。

平成25年3月

拍江市教育委員会

こんなものもあった





